

ゆとり教育が学力低下に及ぼす影響についての一考察

A study on a drop in scholastic ability due to the influence of less strenuous education

1K05B016

石垣 直子

指導教員

主査 吉永武史先生

副査 石井昌幸先生

【序章】

私はこれまで、ゼミや様々な教育関連の授業にて多くの教育に関する分野に接してきた。

その中で特に興味がわいたものが、教育史と教育改革についてである。本研究では、「ゆとり教育」と「学力低下」の因果関係や、これに教育改革がどう影響を及ぼしたかについて追及していくことを目的とする。このために、ゆとり教育の本質と新学習指導要領の本質に迫り、「学力」の2つの捉え方についても明らかにしていく。方法としては1997(平成9)年から2007(平成19)年までの教育白書及び文部科学白書を参照し、学習指導要領の変遷と改革の意図、これらの具体的な内容に迫るとともに、ゆとり教育と学力低下論争に関連する文献資料からもこれらの因果関係について検討を試みた。

【第1章】

受験競争の激化により、授業内容についていけない「落ちこぼれ」と呼ばれる子どもが多数生み出され、これによる学習意識の低下、いじめや不登校、学校内暴力など、様々な問題行動の深刻化がみられた。また、子どもの人間育成にとって重要な生活体験・自然体験・社会体験等に充てる時間や家事を手伝う時間、睡眠時間までもが十分に確保できていないという状況であったことがわかった。こういった背景により、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康・体力」の3つを構成概念とする「生きる力」の育成を目指してゆとり教育が導入されたのである。確かな学力の目的は、知識や技能に加え、自ら学び・考える意欲や問題

発見能力、この解決能力等の獲得であった。豊かな人間性については、これを身に付けることが学校における様々な問題行動を解決する糸口として、期待が込められているようであった。また、確かな学力との関連性について考えてもその重要性は定かである。健康・体力の目的は、人間が成長するにあたって必要な健康・体力を子どものうちから身に付けておくことにあったということが明らかになった。

【第2章】

学力の捉え方の1つ目は、基礎的・基本的な知識や技能のことを示し、ペーパーテストで計測しやすく、形となって表面化しやすいものであり、今日ゆとり教育が原因で学力低下と騒がれているのはこちらの捉え方の学力である。2つ目の捉え方は、環境適応能力や問題解決能力、判断力や表現力等、知識の詰め込みだけでは得られない能力を示す。様々な調査結果より、最も深刻な問題は子どもに学習意欲と学習する習慣が身に付いていないことであり、これが学習時間の減少とこれに基づく基礎基本の知識・技能の不足をもたらしている。また、このことがゆとり教育見直しの大きな根拠となってくる。

【第3章】

ゆとり教育の反省を生かして、2007(平成19)年施行の新学習指導要領ではゆとりと詰め込みの一体化を図った。具体的な改革内容としては、総合的な学習の時間や選択教科の時間を大幅に削減し、代わりに教科教育に充てる時間を従

来よりも多く確保したことが代表的である。これにより、生きる力の育成と基礎基本の知識・技能の習得のバランスを図り、多様に変化する社会に対応できる能力と資質を養うことをねらいとしたことが、この新学習指導要領の最大の特徴であることがわかった。

【結章】

すべての問題を解決する糸口となるのが、子どもが自主的に学習する意欲とその習慣を身に付

けることであると提言してきたが、最終的な目標はこれに留まるわけではない。意欲と習慣を基に学習した結果、基礎的・基本的知識や技能の習得がなされていくことが今後の課題であると感じる。

こうして総合的な能力を身に付けていくことが今後、多様に変化し多くの問題を抱える社会を生きていくにあたり、また、各方面からのニーズに答えていくためにも必要不可欠となってくると感じるのである。